OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 持続と言語 |
| Author(s) | 小林, 照顕 |
| Citation | メタフュシカ. 1997, 28, p. 99-116 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/66602 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 持続と言語

小林照顕

## はじめに

ベルクソンの哲学において、実在は「持続 durée」である。その持続のうち、我々が最もよく知り得るものは「自我」である(cf. P.M. 182)。しかし、我々はその自我の状態を、語や概念によって再構成することも認識することもできない(cf. P.M. 193, D.I. 92-102)。なぜなら、持続の性格と言語の性格との間には差があるからである。『意識に直接与えられているものについての試論』(以下、『試論』と記す)によると、語や概念は、持続についての抽象的見方,固定的見方にすぎず、この抽象化や固定化は行動の観点に基づいている(cf. D.I. 96-98, 123-126)。すなわち、語や概念が表現するのは、自我状態の変様であり、したがって、語や概念は自我の再構成や認識には不適である、と見なされる。更に、自我の再構成や認識、という言語のこの不適切な使用から、「自由行為の否定」という錯覚が生じることについても述べられている(同書第三章)。全体として『試論』では、言語は持続に対し消極的な意味しか持たないのである。

なるほど、行動の観点に立つ言語は自我の再構成や認識には不適である。しかし、自由行為の否定は、言語の不適切な使用から生じた偽問題でしかない。したがって、言語自体が自由行為に否定的であることにはならないのである。実際、『試論』での言語の扱われ方は、ベルクソン哲学全体の中では部分的ではないだろうか。『試論』で取り上げられた言語は、社会が個人的な自我を固定化したり不動化したりする、という観点のもとにのみ置かれていた。だが後のベルクソンの著作では、言語の原初的機能は伝達 communication として特徴づけられ(cf. P.M. 86-87)、伝達としての言語は、単に、社会による個人的な自我の固定化や不動化という『試論』の言語観には収まらな

いのである。

言語は伝達という点で、持続に対し積極的な意味を持つのではないだろうか。我々は、言語の不動化・固定化と伝達との関係を調べ、持続と言語の関係を考察する。また、『試論』において積極的に自由行為として挙げられているのは、「個人」の行為である（cf. D.I. 129-130）。この「個人」という語は、社会（外界）をもって初めて成立するはずである。この個人的行為が言語の伝達として起こるのであれば、言語は持続に対し積極的な関係を持つのではないだろうか。

## 一　『試論』に見られる持続と言語の関係

まず、『試論』での持続と言語の関係について検討するにあたり、『試論』に沿って「持続」や「自由行為」といった概念について述べておこう。

一般的に、時間は計測されるものとして考えられている。ベルクソンは、このような計測のための時間を、「等質的時間」（cf. D.I. 74-82, 92-96）と呼ぶ。この等質的時間は、真の時間ではなく、真の時間である実在的持続の「象徴的イマージュ」（D.I. 93）にすぎない、とベルクソンは見なす。この「持続」こそが、相互浸透する不可分な異質的継起であり、一度限りの実在性を持つ時間である、とベルクソンは主張する。等質的時間が持続に対する単なる象徴であるのは次のような理由によっている。すなわち、等質的時間は、測定の単位として扱われるため、それ自体は相互外在的であり、時間としての連続性や継起を保持し得ず、したがって、等質的時間は、まさにその時における独自性・実在性を持ち得ない単なる象徴にすぎないのである。それに対し、等質的でもなく相互外在的でもない時間、すなわち、相互浸透する不可分な異質的継起である持続は、時間としての連続性を保証している。それゆえ、持続こそが真の時間なのであり、このような持続は『試論』では「自我」に求められている。自我こそが、多様な意識状態が相互浸透する異質的継起として認められたのである。これに対し、語や概念は、社会的生への行動の観点（実践的観点）から（cf. D.I. 97）意識状態を不動化した象徴にすぎない。したがって、自我の意識状態を表す語や概念（言語）と自我との関係は、等質的空間と持続との関係、象徴と真なるものとの関係にある、と見なされる（cf. D.I. 96-103. 特に 97）。それゆえ言語は、相互浸透する異質的継起といういわば動的な自我（持続）の認識には不適とされる（cf. D.I. 96-98, 123-126）。つまり、行動の観点に立つ言語は、いくら語や概念をつくしても、語や概念自体が不動化させられたものであるため、自我の動性を表現できないのである。固定的見方である語や概念によって、生成である持続を再構成することは、不動性によって、それと本性上異なる動性を表現する

ことである。不動性から動性へと本性上の差異を越えることは不可能である。このように『試論』では、言語が、直接的所与・直接的経験である持続を変様（固定化）させることが強調されている（cf. D.I. 98）。この点は、『試論』以降の著作においても受け継がれており、「持続を固定化してその本質である動性や生成を損なうもの」として言語は位置づけられることになる。

持続と言語が本性的差異を持つことをふまえて、『試論』第三章では自由行為について議論されている。その議論の大半は、自由行為を否定する主張自体が偽問題であることを示すことについやされ、この議論は、いわば、自由行為自体については消極的である。この消極的な議論では、自由行為の否定として、行為の予見可能性や決定論が挙げられている。この行為の予見可能性や決定論は、本来持続である意識や自我を語や概念に記号化し、その記号化された語や概念の組み合わせから行為を決定づけ、自由行為を否定する。しかし、この行為の予見可能性や決定論自体が基づいている前提は、語や概念の組み合わせは自我や意識を再構成し得るという誤った前提である（cf. D.I. 105-124）。それゆえ、行為の予見可能性や決定論は論駁される。このように、語や概念と持続とをとりちがえたことへの批判の延長線上に、自由行為についての消極的な議論があるにすぎない。

自由行為について積極的には、自由行為は個人的行為である（cf. D.I.124-126）と述べられている。この個人的行為を説明するためには、「自我の二様相」と、個人的行為の対立項である「心的表層的生」や「自動性」について述べておく必要がある。

『試論』では、人格／個人を構成する自我に二つの様相が認められている。一方は、個人的で本来的な自我である「内的自我」という様相であり、これは、「感じたり夢中になったりする自我、熟考したり自己決心する自我、諸状態と変様が緊密に相互浸透しあう力」（D.I. 93）と特徴づけられている。[1] 他方は、この自我の変様態である「表層的自我」である。この表層的自我が変様態として生じる原因は、内的自我が言語や外界（社会）に実践的に適応する点に求められる。この表層的自我のみによる行為や生は「心的表層的生」（D.I. 93）と呼ばれ、いわば日常的な生を意味する。この生は、言語や社会が固定化・不動化した外界の事象に従ってしまう（cf. D.I. 126-127）。つまり、言語や社会への適応から生じた表層的自我が、外界の事象の因果性に沿って行動を決定し、行動を自動性と化してしまうのである。したがって、心的表層的生や自動性は、個人的な自我に関ることがないため、自由行為を否定してしまう。内的自我と表層的自我との差は、行動の自由と自動性という本性の差を引き起こすのである。外界に従う心的表層的生の自動性に対し、ベルクソンは、個人の「内的状態の外的表現」（D.I. 124）が自由行為である、と積極的に述べる。この個人的表現（個人的行

為）が自由行為であるのは、「自由行為の作者である、と我々の自我だけが主張する」（D.I. 125）からである。特定の人格（個人）の「内的状態の外的表現」（D.I. 124）が、すなわち、内的自我からの行為が、自由行為なのである。「つまり、我々の行動が人格全体から発する時、我々の行動が人格全体を示す時、芸術家とその作品に往々にして見いだされるあの定義できない類似を我々の行為が我々の人格との間に持つ時、我々は自由である」（D.I. 129）（強調、論者）。

このように自由行為についての積極的な議論でも、言語は心的表層的生に属す限り、持続に対し消極的である。心的表層的生は、パターン化された行動（固定化した行動）を展開するだけの反復的な生であり、この生は、本来異質的継起である持続的な自由行為を妨げるのである。

ここで『試論』で示された自由行為に関する議論における言語についての評価をまとめておこう。まず、消極的な議論では、持続でない語や概念によって持続をとらえようとする記号化の点から、言語は批判された。次に、積極的な議論での言語の批判点は、言語が内的自我の活動を実践的な心的表層的生へと変様させる結果、行動が外界に従って固定されてしまう、という点にある。認識の記号化にしろ、行動の固定化にしろ、言語は動的な持続を不動化することになるのである。

## 二　言語の不動化と身体

前節より『試論』での言語批判は、認識の記号化と行動の固定化という二点でまとめられよう。この言語の不動化に執着することをめぐって（cf. P.M. 32）、ベルクソンの言語批判は繰り返されたと言えよう。ベルクソンの後期の著作『思考と動くもの』所収の「緒論第二部」（以下、『緒論』と記す）から言語批判を取り上げてみよう。その言語批判を象徴する語は、「言語偏重主義 verbalisme」（P.M. 84）と「言語人 Homo loquax」（P.M. 92）である。これらは、社会的生に有用な概念を操作することに終始する態度や、社会的生に有用な概念を組み合わせるだけで、実在の認識を得ようとする態度である（cf. P.M. 91）。つまり、これらの態度は、様々な問題の解決にあたり、実際に探求することもせずにある対象についての結論を他の対象に適用する態度であり、ある結論や概念といった言語の内に保存されている不十分な認識で体系を打ち立てる態度である（cf. P.M. 98）。既に記号化された認識に囚われているこのような精神の態度は、『試論』での心的表層的生に等しい。

以上のように、言語の不動化に執着する精神の態度が『緒論』でも批判されているのである。しかし、『緒論』ではさらに、言語の原初的機能について述べられ、ここから言語の不動化が生

じてくることが説明されている。言語の原初的機能は、「共同作業のために伝達を打ち立て」、「命令や警告を伝える」ことであり(P.M. 86)、言語の機能は常に「社会的」である(P.M. 86-87)。社会内で労働を組織化するように、言語は事物や活動様式や人物を示唆する伝達の作用なのであり(cf. P.M. 86-87)、この伝達のために言語の不動化が起こるのである。すなわち、言語の不動化は、社会内の複数の個体の意識に共通な不動化である、と言えよう。

では、複数の個体の意識に共通な不動化は、何によって可能になるのだろうか。この問いに対する答えの不可欠な要素の一つに、ベルクソンは「身体 corps」を考えていたと思われる。以下の検討から明らかになるが、なるほど個体の意識は初め身体によって区別されるが、複数の個体の意識に共通な不動化も身体に大きく関わっているのである。まず、個体と身体との関係を人類の社会において考察してみよう。(2)

「まず、イマージュの総体がある：この総体の中に、利害ある諸イマージュが反射してくるような《作用／行動の中心 centres d'action》がある：このようにして知覚が生まれ、行動が用意される。私の身体 mon corps は、これらの知覚の中心に現れるものである：私の人格 ma personne は、これらの(用意された)行動が関係づけられるべき存在である。」(M.M. 46)

よって、人格／個人とは、身体の知覚状況に対し用意された行動が関係づけられるべき存在である。そして身体は、外界と人格／個人との関係で重要な意味を持っている。

「私の宇宙の中心や私の人格の物理的基盤として私が採用するのは、この特殊なイマージュ(「私の身体」(cf. M.M. 62))である。」(M.M. 63)

以上より、人格／個人の区別は、身体が外界(宇宙)に占める位置による、と推測される。実際『物質と記憶』では、身体とこれに関わる人格／個人の意識について次のように考えられている。身体は、他の物体と違い、宇宙内で作用・反作用を選択することから、身体は非決定な「作用／行動の中心」である(cf. M.M. 14)と見なされる。それゆえ、身体を介して現れる意識、知覚は、外界に対する身体の可能的行動を示す(cf. M.M. 14-16)と考えられる。そして、人格／個人は、身体の知覚状況に対し行動が関係づけられるべき存在である(cf. M.M. 46)と認められたことから、身体毎に人格／個人の意識は区別されると考えられる。身体による個体の意識の区別は、人格を持たないような低級な生命体の個体の意識に対しても同じように考えられている。低級な生命体をも含めた「生 vie」の説明においても次のように述べられている。

「個体の意識に与えられた行為によって自己を示すという能力は、生命体に個別に対応する判明な物質圏の形成を要求する：この意味で、私固有の身体やこれとの類比による他の生命

体は、宇宙の連続性の中で私が区別するもっとも根拠あるものである…栄養摂取の欲求の周りに、個体の保存や種の保存を目的とする別の欲求が組織される。」(M.M. 221-222)

低級な生命体 corps vivant も、身体 corps の行動に従って個別にその物質圏を形成することで、各個体が区別される。このように身体によって、個体や人格／個人は区別される端緒を持つのである。

しかし、生命体は環境の中から利害ある特性のみを孤立させることから (cf. P.M. 55)、複数の身体に共通な欲求や傾向から、複数の個体の意識に共通なものが打ち立てられる。ここから、複数の個体の意識に共通な不動化が可能になる。なぜなら、本能や本能を模倣し得るような習慣 (cf. P.M. 55-56) が、傾向や欲求によって (cf. M.M. 176)、作用／行動の中心である身体に同一反応を起こさせる結果、身体は非反省的に類似を抽出するからである。この場合の類似は、多様な知覚に対する身体反応や運動の「同一性」(P.M. 56) による不動化なのである。本来、言語の不動化は、社会内での労働組織化のために事物や活動様式や人物名を伝達するために起こった (cf. P.M. 86-87)。すると、言語を持ち労働組織化するような種であれば、言語による各個体の意識の不動化は、各個体の行動形式による不動化やその始まりである身体による不動化に含まれるはずである。言語の不動化は行動形式に基づき、その行動形式の始まりとして身体がある。ここで、言語の不動化と身体との関係について次のように述べることができる。言語の不動化の前提である、社会内の複数の個体の意識に共通な不動化は、行動形式やその始まりである身体に依存する。

したがって、言語の伝達機能を考察するためには、行動形式やその始まりである身体を考慮する必要がある。実際、社会の方向へ進化したとされる生物の考察では、その行動形式の進化が言語に影響を与えたことが述べられている (cf. E.C. 158-159, M.R. 22-23)。まず、本能へ進化した昆虫の社会とその言語について取り上げてみる。そこから人類の社会 (知性の社会) の言語を特徴づけてみたい。

ベルクソンは、「自然によって与えられた器官、したがって不動の器官」(M.R. 22) を利用することが、本能の本性的目的である (cf. E.C. 140-142) と見なす。つまり、昆虫のような本能的動物の行動形式は、その生物種の身体によって生得的に固定されているのである。伝達は行動形式によるので、本能の社会で伝達される記号も、本能によって各個体に固定的に与えられていることになる (cf. E.C.158-159)。つまり、本能の社会での言語は、生得的な固定的な記号の交換にすぎないのである。

人類の社会 (知性の社会) では行動形式が変化することから、各個体の役割は社会の構造に対し前もって定められていない (cf. E.C. 159)。それゆえ、各個体は社会内で役割を学ぶ必要

があり、そのために、各個体が「既知のものから未知のものへ de ce qu'on sait á ce qu'on ignore」(E.C. 159)(強調、論者)へと移ることを可能にするような言語が、人類には必要とされる(cf. E.C. 159)。したがって、人類は社会内では「新しいこと」を伝達しているのである。

これまでの考察では我々は、言語の特徴を伝達のための不動化に認めた。その不動化は、複数の個体間での行動形式やその始まりである身体に求められたのであった。それでは、伝達のための不動化と、「新しいこと」の伝達とは相反しないのであろうか。我々は、伝達のための不動化と「新しいこと」の伝達とが両立する理由を考察しなければならない。また、ある個体から別の個体へと「新しいこと」が伝達される場合、この伝達は社会内での特殊な伝達であり、「新しいこと」の伝達は個人的行為を成立させるはずである。それゆえ以下の考察では、「新しいこと」の伝達が個人的行為と成り得る言語の構造についても検討していきたい。

## 三　人類の意識と身体について

個体が個人的行為としての伝達を可能にするには、昆虫のような本能とは異なる身体的条件が必要である。というのも、もし、昆虫の身体のように、人類の身体が個体の意識を区別するのと同時に、生得的に行動形式が決定されるなら、個人的行為としての伝達は不可能になってしまうからである。人類の身体が個体の意識に決定的な行動形式を与えなかった理由には、人類の生命進化が言語へ向かった点が挙げられている。先述したように、身体は作用／行動の中心であり(cf. M.M. 14)、身体を介して現れる知覚は、外界に対する身体の可能的行動を表していた(cf. M.M. 14-16)。そして、この知覚・可能的行動の選択は、身体の神経系の複雑さに比例する(cf. M.M. 42-44)[3]。人類以外の動物の場合、脳内運動の組み合わせが限定されていることから、動物の意識は種の習慣や自動性に閉じこめられ支配されている(cf. E.C. 263-264)。それに対し、人類では、言語の進化が、脳に備え付けられる機構の数や選択される始動装置の数を無限に増やし、その結果、人類の意識は逆に諸習慣の自動性を制御・支配するようになった(cf. E.C. 184-185, 264-265)と『創造的進化』では述べられている。語に対応する脳機構が、それ自身に対してや他の事柄に反応する機構に対して葛藤を引き起こし、その結果、行動遂行に溺れてしまうはずの意識が、自己を取り戻し、身体機構から解放されたのである(cf. E.C. 184-185)。それゆえ、人類の意識は、昆虫の意識や他の動物の意識のように身体に囚われることがないのである。確かに、生命進化によって、人類の意識は身体に囚われなくなった。しかし、これは意識が身体の習慣的な機構を支配す

るようになっただけであり、意識は身体の用意する習慣に対し、選択の自由を持つにすぎない。すると、社会内では固定されたものが伝達されるだけで「新しいこと」は伝達されないだろう。個体間で伝達される要素は、複数の身体間に共通な行動形式であり、身体によって不動化されて与えられる既知のものにすぎないのである。

「新しいこと」の伝達について検討するまえに、ここで我々は生命進化の考察から個体の考察へと移る必要がある。というのも、生命進化の観点から考察された意識は、外界という空間への行動形式にすぎなかったからである。事実、我々は、言語の伝達性を重視して、外界（社会）という空間内において複数の個体の意識を区別することから考察を始めた。その個体の意識の区別は身体に認められ、その考察は、知覚すなわち外界への行動形式に限定されていたのである。だが、身体は人格の物理的基盤にしかすぎない（cf. M.M. 63）。もし、人類の意識が身体によって不動化された意識（知覚）のみに限られるとすれば、それは『試論』での自我（持続）の連続性の記述（cf. 本稿第一節）に反することになる。意識が行動形式やその始まりである身体による不動化を受けているにしても、その意識は人格／個人を形成する意識の一部、すなわち知覚にすぎず、その不動性ゆえに、『試論』での心的表層的生を成すにすぎない。確かに、外界の時間的な流れを自己と同時に知覚しているという点では、意識は現在という瞬間を保持している。しかし、外界の知覚だけでは、意識はそれ自身の連続性としての持続を持ち得ないのではないだろうか。

ここで我々は心身関係を考慮することから『試論』の「意識」の概念を明らかにする必要があるだろう。[4] ベルクソンは『物質と記憶』で心身関係を考察するにあたり、「意識」と「無意識」の二つを用いて、個体の意識の連続性を保持している。繰り返すことになるが、知覚である意識は、外界への行動形式であり、いわば個体が外界に対して持つ意識の空間的な拡がりである。それに対し、個体の意識の時間的な拡がりをベルクソンは「純粋記憶 souvenir pur」という「無意識」[5]に求めている。ベルクソンが意識と無意識との区別を立てた理由は身体にある。身体は作用／行動の中心であった（cf. M.M. 14, 本稿第二節）。この身体は生命体であるため、「環境との平衡、生の一般的目的である適応」（M.M. 89）、すなわち生命保存を第一にして行動しなければならない。そのため、各個体の意識は外界に対する行動に向けられなければならない（cf. M.M. 89）。『試論』で述べられたように意識が過去の意識を保持していても、生命保存のために行動へ向かうべき意識にとっては、現在の状況に関わらない記憶を想起することは有用ではない。なぜなら、現在の状況に関係なく過去についての意識が想起されるのなら、意識は行動するにあたり混乱してしまうからである（cf. M.M. 89-

91)。それゆえ、現在である行動に対し記憶は無力であり、その無力さゆえに記憶は意識に現実化されず、記憶は潜在的意識として無意識に留まるのである（cf. M.M. 156-157)。このように、個体の意識の連続性を潜在的に保持している無意識は、「純粋記憶」と呼ばれる「個人的な記憶」(M.M. 116) である。

生命進化によって人類の意識は身体に囚われなくなっただけではない（cf. E.C. 184-185, 264-265, M. 486-487)。人類の意識は純粋記憶からの想起の自由をも持つことになった、とベルクソンは認めている（cf. M.M. 199-200)。しかし、人類も生命体である限り、記憶の現実化は身体の現在時の感覚や運動に関係づけられる必要がある（cf. M.M. 156, 193)。そのため、身体が記憶の現実化を調整・制限し（cf. M.M. 86-88, 199-200)、行動に有用な記憶しか想起されないのである（cf. M.M. 90)。

ここで人類の個体の意識と身体についてまとめておこう。人類の個体の意識は、身体に物理的基盤を持つことから区別されたが、単に身体の意識に還元されるのではない。人類の個体の意識は、その連続性として、潜在的な意識である純粋記憶を保持している。しかし、行動への有用性の観点から純粋記憶の意識への現実化が制限され、行動や身体と関わりを持つ限りにおいて、それらに有用な記憶のみが意識に現実化されるのである。個体の意識の連続性を保持する純粋記憶は、行動への有用性への観点から身体によって、いわば時間的に意識への現実化が制限されているのである。(6)

## 四　理解・解釈の知的努力

これまでの考察では、身体間で交換される不動化された要素では「新しいこと」の伝達が不可能であることを確認した。「新しいこと」の伝達が、社会内でのその特殊性ゆえに個人的行為と考えられ（cf. 本稿第二節)、また、個人的行為は、人格／個人全体を示す行為（cf. D.I. 129) であった。したがって、『試論』での個人の時間的な拡がり（個人的な記憶）を伴った伝達の場合、「新しいこと」の伝達は可能になるのではないだろうか。

ところで、ベルクソンは、「多少とも直観をとらえた、根本的に新しく絶対的に単純な観念の明晰さ」(P.M. 31)（強調、論者）を得るには「努力」が必要である、と示唆している。すると、「新しいこと」が伝達される場合においても、努力が必要ではないかと推測される。そこで以下、我々は「理解・解釈」の知的努力において、「新しいこと」の伝達が可能であることを確認していきたい。そのため、『精神エネルギー』所収の「知的努力」（以下『知的努力』と記す）とこれの理解を補う『物質と記憶』を用いて、理解・解釈（以下、解釈と略す）の知的努力について見てみよう。

計算をたどることが計算を自分でやり直すことであるように(cf. M.M. 129, E.S. 169)（強調、論者）、聞いたことや読んだことを解釈することは、他人が話すことや書いたことを解釈者自身が努力して「再構成」(cf. M.M. 129, E.S. 171) することである、とベルクソンは述べている。この再構成は、解釈者から提示される「力動的図式 schéma dynamique」(E.S. 173) によって方向付けられる。力動的図式とは、「これから知覚しようとするものの意味作用 signification に関わる仮説」(E.S. 173) や「この知覚と過去の経験のある特定の要素との確からしい関係に関わる仮説」(E.S. 173) であり、再構成を始めるには不可欠なものである。解釈は語から諸観念に進む、と一般的には考えられているが (cf. E.S. 172)、実際は、解釈は解釈者側の力動的図式から始まる、とベルクソンは主張する。なぜなら、解釈されるべき文 phrase を構成している語 mot それぞれが、個別的に意味や観念を表すのではないからである (cf. E.S. 172)。また、語はその文脈の前後関係から特殊な意味作用のニュアンスを借りたりもするからである (cf. E.S. 172)。

それでは、話を聞いたり本を読んでいるときは解釈者は何を聞き取り、何を読み取っているのだろうか。解釈者が聞き取ったのは発音された語の一部であり、読み取ったのは文字の縦線や描線である (cf. E.S. 170) とベルクソンは述べている。そして、解釈者に与えられるナマの brut 聴覚や視覚は、解釈のための「標識 points de repère」や「枠 cadre」にすぎず、この知覚された標識・枠に解釈者自身が記憶を満たすのである (cf. E.S. 170)。つまり、解釈者が実際に聞き取ったり読み取った標識・枠は、「対応する観念の秩序に我々（解釈者）をおくために必要なもの」(E.S. 171) にすぎないのである。

一体、この標識・枠はどのようにして与えられるのだろうか。この問題については、ベルクソンの指示に従って『物質と記憶』を参照してみる。[7] 『物質と記憶』では、標識・枠を認める感覚印象の再認について、聴覚的再認が考察例に挙げられている (cf. M.M. 120-)。感覚印象（聴覚印象）がいかに再認されるのか、という問いに対し、ベルクソンは「運動図式 schème moteur」(M.M. 121) を用いて答える。聴覚印象が、身体内で起こる「初発的運動」の感覚（「初発的筋肉感覚」(M.M. 121)）へと分節化され、この主要な分節が意識内で強調されることが、運動図式である (cf. M.M. 120-128)。例えば、語や文が物理的に異なった様々な音色の声で発せられても、なぜ語や文が同一視されるのか (cf. M.M. 130-131) という問いに対しても、運動図式をもって答えることができる。たとえ音色が違っていても、語や文は、解釈者の身体内での分節の強調によって、すなわち運動図式によって、同一視されることになるからである。そして、解釈者の身体内の初発的運動は、習慣が身体内に構成した運動装置として説明されている (cf. M.M. 122, 267)。[8] つ

まり、習慣によって身体内に起こる初発的運動の感覚が、解釈者の持つ標識・枠といった「イマージュとの最初の接触」(E.S. 171) になるのである。[9] 解釈者自身の身体内の運動図式によって語や文は同定され、運動図式によって同定されたこと自体について、イマージュ（標識・枠）が生じる。この運動図式によるイマージュ（標識・枠）と、力動的図式とを解釈者が試行錯誤し相互に完全に適応させた場合、解釈者自身が解釈を「新しく創造する」(E.S. 169) ことになるのである。

ここから、「新しいこと」の伝達の問題、すなわち、伝達のためには複数の意識に共通な不動化が必要であるがこの既知の要素の伝達がなぜ「新しいこと」の伝達をも可能にするのか、という問題について答えることができよう。人類の言語は、伝達可能な既知の要素として、複数の身体に共通な初発的運動の感覚を持っている。この既知の要素は「新しいこと」の内容ではなく、標識・枠にすぎない。しかし、この標識・枠を解釈者（伝達された者）がとり入れ、解釈者自身が知的努力を行うことによって「新しいこと」(の内容) が創造される。人類の言語では、この解釈者自身の創造も伝達に含まれるのである。このような事態は、社会内での伝達する者から伝達される者への単なる模倣ではない。伝達される者自身が努力しなければ、「新しいこと」は創造されることさえなく伝達が遂行されることもないのである。[10] したがって、伝達される者に「新しいこと」が創造／伝達されるには、力動的図式と、標識・枠（運動図式による同定も含む）と、標識・枠を埋める記憶が必要である。「新しいこと」が生み出されるのは、外界からではなく、伝達される者自身の個人的な記憶（純粋記憶）や知的努力からなのである。

ところで、人類の言語では、「新しいこと」の伝達に限らず、「日常的なこと」が伝達される場合においても、標識・枠である初発的運動の感覚と、それを満たすための記憶や力動的図式が必要なのではないだろうか。もし必要であるなら、知的努力を伴う解釈と、心的表層的生においての自動的な解釈との間には、どのような差異があるのであろうか。自動性が見られる解釈では、知覚されるイマージュ（標識・枠である感覚）は機械的に解釈され、このような解釈は知的努力を含まない (cf. E.S. 167-168)、と述べられている。また、知的努力には程度の差があり、その程度の差は、イマージュ（標識・枠）と力動的図式との相互適応の難しさに認められる (cf. E.S. 177)、とベルクソンは主張する。したがって、知的努力を伴う解釈と、自動的な解釈との間には、イマージュ（標識・枠）と力動的図式との相互適応の難しさのさまざまな段階がある、ということになろう。[11]

さて、解釈者が知的努力をする場合、どのようなことが起こるのだろうか。考察してきたように、イマージュ（標識・枠）を満たす記憶や、力動的図式は、解釈者自身から生じている。

知的努力が少ない場合は、イマージュ（標識・枠）と力動的図式との相互適応が容易であり、イマージュ（標識・枠）を埋める記憶が容易に選択された。記憶の選択にしろ、力動的図式の選択にしろ、これは解釈者の個人的な記憶、純粋記憶に関わると考えられる。というのも、力動的図式は、解釈者の記憶や過去の経験に基づく仮説であるからである（cf. E.S. 173）。それゆえ、イマージュ（標識・枠）と力動的図式の適応が容易な場合は、解釈者自身が適応する力動的図式を既に持っていたと考えられる。

逆に、解釈者が適応する力動的図式を見出せず、試行錯誤する場合がある（cf. E.S. 181-182）。この場合は、知的努力が大きい「新しいこと」の解釈（伝達）にあてはまる。適応状況次第で、既知の力動的図式から未知の力動的図式へ、イマージュ（標識・枠）を埋める記憶の既知の選択から未知の選択へと、解釈者の記憶は操作される。これほど多様に、なぜ解釈者は記憶を操作することが可能なのだろうか。『物質と記憶』より、記憶の選択についてのベルクソンの見解を参照してみよう。

ベルクソンは、記憶が、あたかもアトムのようなバラバラな記憶として、いわば相互外在的な記憶として保存される、とは考えてはいない。「不可分な全体」（M.M. 185）を成す純粋記憶として、記憶は保存されるのである。そして、不可分な純粋記憶全体の中から、意識によって特定の記憶が分離されることで、記憶の選択が行われる（cf. M.M. 184-185）。というのも、連合説のように、各記憶を相互外在的なイマージュ（心的アトム）と見なした場合、この相互外在的な独立した存在（心的アトム）を結合させたり選択したりする理由がなくなってしまうからである（cf. M.M. 183-185）。したがって、純粋記憶は（潜在的にではあるが）不可分な全体として意識に与えられ、意識が選択されるべき部分を記憶全体から分離させるのである（cf. M.M. 184-185）。意識に与えられている記憶の不可分な全体とは、本稿第三節で確認した意識の時間的拡がりを意味する。このように、記憶の選択は、純粋記憶という個人的な記憶の不可分な全体において、その個人の意識によって行われる。[12] そして、記憶力は「精神的態勢 dispositions mentales」に応じて無限に多様な体系をつくることから（cf. M.M. 188）、意識によって、記憶や力動的図式の選択は無限になされるはずである。したがって、選択が自動的でない場合、力動的図式とイマージュ（標識・枠）との試行錯誤に応じて、人格／個人全体を伴って想起される記憶や力動的図式といった選択肢が創造されるのである。

では、個人的な記憶全体の中から記憶や力動的図式が選択され、知的努力が行われた結果、解釈者の意識にはどのようなことが起こるのだろうか。イマージュ（標識・枠）と力動的図式との相互適応（知的努力）が困難であった場合、[13] 解釈者の意識

には「上級の明晰さや判明さ une clarté et une distinction supérieure」(E.S. 184) が与えられる (cf. E.S. 184)、とベルクソンは述べている。困難な相互適応では、一方で、力動的図式は記憶やイマージュ（標識・枠）を吸収することで発展し、表象は厚みを持つ (cf. E.S.185)。他方で、力動的図式がこれを展開させ得ないイマージュを廃棄する結果、解釈者の意識の現実的内容には「個別性 individualité」(E.S. 185) が与えられ、解釈者の意識の現実的内容は他の表象から個別化・特殊化されるのである (cf. E.S. 185)。それゆえ、「心的状態が示す努力に、心的状態の豊かさは比例する」(E.S. 185) のである。

ここで知的努力についてまとめておこう。イマージュ（標識・枠）と力動的図式との相互適応の難しさに知的努力が比例し、さらに、この知的努力に解釈者の意識状態の豊かさが比例する。そして、困難な知的努力の場合、イマージュ（標識・枠）を満たす記憶と力動的図式は、個人的な記憶全体に関わる。それゆえ、知的努力で解釈者に与えられる「新しいこと」の創造や上級の明晰さや判明さは、不可分な持続である個人的な記憶全体から起こる個人的行為の産物であると言えよう。当然、知的努力が欠けた場合、力動的図式とイマージュ（標識・枠）との適応が自動的に起こるので、解釈者の意識に上級な明晰さや判明さが新たに付与されることはないのである。

## 五　伝達されることと伝達することについて

言語の特徴は、意識の不動化であった。その不動化は、言語の原初的機能である伝達に由来し、不動化の基準は、複数の個体に共通な行動形式や身体に求められた。人類の言語では、身体の初発的運動の感覚や運動図式によって与えられるイマージュ（標識・枠）が、意識の不動化として見られ、このイマージュ（標識・枠）で個体間の伝達が可能になっている。言語の伝達は、心的表層的生での自動的な解釈と、知的努力を伴う解釈の二つに大別された。この二つの解釈の間には、イマージュ（標識・枠）と力動的図式との相互適応の難しさに応じて、すなわち知的努力の程度に応じて、さまざまな解釈が段階づけられる。段階の一端を成す心的表層的生での言語の伝達の場合、イマージュ（標識・枠）によって、伝達内容は自動的に決定される。この場合、既知の運動として解釈が行われるため、既知のことしか伝達されない。それに対し、知的努力を伴う解釈では、確かに、イマージュ（標識・枠）が伝達を可能にしているが、イマージュ（標識・枠）が伝達内容を完全に決定するのではない。というのも、解釈の知的努力は、解釈者自身に負うところが大きいからである。実際、力動的図式や、イマージュ（標識・枠）と力動的図式を相互適応させる知的努力は、解釈

者個人にその起源を持つ。解釈の知的努力は、伝達の観点からは再構成や模倣と見なされるが、「新しいこと」の伝達の遂行には、伝達された者（解釈者）自身が、話者や著者の思惟の運動を追いつつ、伝達されるべき（解釈されるべき）内容を「新しく創造する」(E.S. 169) ことが必要とされる。その知的努力の過程では、伝達される者自身が、その個人的な記憶全体から、新たに、力動的図式と、イマージュ（標識・枠）を満たす記憶を創り出したり見つけだしたりする。したがって、「新しいこと」の伝達は、既知の力動的図式で解釈が行われる容易な知的努力とは別の過程を経ているのである。また、創造によって、伝達される者には、より上級な明晰さや判明さが与えられるために、「新しいこと」が伝達された者の意識は、これまでとは異質な継起を形成することになる。すなわち、「新しいこと」が伝達された者は、既知のものであるイマージュ（標識・枠）に基づいて知的努力を行うことで、その意識は、創造的な異質的継起を形成するのである。「新しいこと」の伝達においては、言語は、伝達される者に知的努力のための足がかりを与える。身体を介してイマージュ（標識・枠）が伝達されることで、伝達される者は、本来潜在的な個人的な記憶全体を伴った知的努力が可能になるのである。したがって、人類の言語は伝達される者に創造的な持続を形成するように導く端緒になるのである。

以上のように、「新しいこと」の伝達の考察から、「伝達される者」の意識（持続）に対する言語の積極的な関係が見出された。では、「伝達する」場合はどうであろうか。我々は「伝達される者」の考察において、その伝達（解釈）が自動的なものと知的努力を伴うものとの二極で段階づけられることを見た。この心的表層的生に見られるような自動的に解釈すること（自動的に伝達されること）は、実は、自動的に伝達することと同じことになる。なぜなら、日常の会話の大部分の平凡な問いに対する答えの構成は既成のものであり、答えは問いに続くからである (cf. E.S. 168)。つまり、問いが伝達されることとそれに対して答えを伝達することは、自動的な一連の運動になっているのである。もちろんこの場合、『試論』や『緒論』で批判された心的表層的生での言語であり、この言語は、伝達する者の意識（持続）には消極的な意味しか持たない (cf. 本稿第一節、第二節)。

では、「新しいこと」を「伝達する者」の意識（持続）の場合はどうであろうか。「新しいこと」を伝達する場合においても、伝達される場合と同様、個体間（身体間）で伝達されるのは、複数の意識の共通性を保持するものである。つまり、これは複数の意識間で不動化されているイマージュ（標識・枠）でしかなく、初発的運動の感覚を引き起こすものでしかない。「新しいこと」が真に伝達されたのは、伝達される者自身が知的努力を行い、自己の意識に上級の明晰さや判明さを与え、自己の意

識（持続）を創造する時であった。それでは、「新しいこと」を伝達する者にとり、イマージュ（標識・枠）は、既に創造された「新しいこと」を伝達するものという性格しか持たないのだろうか。単に伝達という点だけでなく創造という点でもベルクソンは、イマージュ（標識・枠）に重要な性格を与えていた。というのも、「新しいこと」を伝達する者にとって、「新しいこと」の初めての伝達と創造は同一のことである、とベルクソンが考えていたからである。

「新しいこと」の伝達を、具体的に、小説を書く（創造する）例として扱えば、「新しいこと」の初めての伝達と創造が同一のことであると見なされていたことが明らかになるであろう。小説を書く例については、再び『知的努力』から検討したい。小説を書く例は、発明の努力の一例としてとりあげられている。発明の努力とは、未だ現実化されていないものを現実化することであり、この努力は「図式 schéma」(E.S. 175) からイマージュへの展開である (cf. E.S. 175-176)。その努力の過程は、解釈の知的努力での力動的図式とイマージュ（標識・枠）との相互適応に同様である。小説を書く場合、まず、小説家は精神内に、図式として「何か単純で抽象的なもの」(E.S. 175) を持つ[14]。図式である「書こうとすること」を小説家は言葉という「具体的形」(E.S. 175)（「要素である判明なイマージュ」(E.S. 175)）へと変えようとし、図式と言葉（イマージュ）とを相互適応させるのである。この相互適応の過程では、図式自体も「現実に書かれたイマージュ」（言葉）の影響を受け、「予想できないもの」(E.S. 176) が生じることがある。このような試行錯誤の結果、小説家は小説を書き上げ創造する。このように、伝達する者にとり、初めての「新しいこと」の伝達自体が「新しいこと」の創造となるのである。

以上のように、伝達される場合に身体の初発的運動の感覚といったイマージュ（標識・枠）が必要であったのと同様に、「新しいこと」を伝達／創造する場合においても、言葉というイマージュが必要だったのである。この点については、生命体である各個体の意識は外界に対する行動へ向けられねばならなかったことからも理解される (cf. M.M. 89、本稿第二節)。小説家が自己内に持つ図式や意識を知的努力によって明晰化・判明化するには、身体と関わりを持つようなイマージュへの現実化が必要だったのである[15]。以上より、解釈の知的努力同様、小説家も知的努力の相互適応で自己の意識に上級の明晰さや判明さをもたらし、自己意識の持続を創造している、と考えられよう。小説家は自己の内と外へと同時に「新しいこと」を伝達／創造したのである。したがって、「新しいこと」を伝達する者も、言語を用いた知的努力で自己の意識を明晰化・判明化させ、自己の持続を創造しているのである[16]。

## おわりに

『試論』での言語の特徴は意識の不動化であった。しかし、不動化の特徴は、言語の原初的機能である共同作業のための伝達の必要性に由来する。社会内での行動形式が身体と一体化し不動化しているような人類以外の生物では、伝達は固定した記号の交換にしかすぎず、不動化した伝達であった。それに対し、行動形式が変化する人類の社会では、言語は不動化した伝達だけにとどまらず、「新しいもの」を伝達することも可能にしていたのである。人類の言語では、伝達に必要な複数の個体間の共通性は、身体の初発的運動の感覚というイマージュ（標識・枠）によって保証されている。しかし、「新しいこと」の伝達は、イマージュ（標識・枠）よりも、むしろ、伝達する者や伝達される者の知的努力に負うところが大きいのである。この「新しいこと」の伝達は個人的行為として成立するため、言語は持続に対し積極的な意味を持つ。つまり、人類の言語は個人的行為を許容しているのである。

しかし、以上の点は、いわゆる言語だけでなく絵画や音楽などにおいても同じであると考えられる。絵画や音楽での個人的行為も表現として伝達される限り、言語は表現一般と区別されなくなるだろう。しかし、生命進化の観点から考察すれば、言語の原初的目的である伝達と表現一般とは区別されるべき点を持つであろう。伝達やその目的である社会性への生命進化によって、個人的行為（「新しいこと」の伝達も含む）の可能性が開かれたのである。つまり進化の観点では、伝達や社会性から、個人的な自由行為が可能になったのである。では、伝達されることもなく単に自己内に留まるような個人的行為は、生命進化の観点からは本来的ではない、と推測されるのではないだろうか。実際、生命進化が社会的生をめざしていることや、社会と個人的自由との間には密接な関係があることが述べられている（cf. E.S. 26-27）。言語について残された問題は「社会性を持つ伝達としての個人的行為／自由行為が、自由行為全般に対しどう位置づけられるのか」という問題に置き換えられよう。

**注**

ベルクソンの著作からの引用・参照は、次の略号と頁数の併記によって示す。

D.I.: Essai sur les données immédiates de la conscience, P.U.F., 1991

M.M.: Matière et mémoire, P.U.F., 1985

E.C.: L'évolution créatrice, P.U.F., 1991

E.S.: L'énergie spirituelle, P.U.F., 1993

P.M.: La pensée et le mouvant, P.U.F., 1996

M.R.: Les deux sources de la morale et de la religion, P.U.F., 1988

M.: Mélanges, P.U.F., 1972

(1) 本稿では、便宜上、『試論』第二章における「自我の二様相」をもとに、同書第二章、第三章での自我の様相を以下のように二つに分け、自我の二様相を「表層的自我」「内的自我」で統一する。「表層的自我」：表層的自我、屈折した自我、寄生的自我、外的殻、区別・固定化された自我。「内的自我」：より深い自我、根本的自我、具体的自我、底にある自我、本来的に異質的継起である持続的な自我。

(2) 説明の便宜上、人類の社会の個体を人格／個人として取り扱う。しかし、非人格的な個体の場合、人格／個人は否定されるだろう。というのも、心的表層的生では、個体は認められつつも、個人的行為は認められないからである。

(3) 神経系の役割は、神経刺激を利用して、これを現実的或いは潜在的に達成される実践的態度へ転換することである (cf. M.M. 42)。身体の末梢から中枢への神経繊維の数に比例して、我々の運動的活動性に問いを提起し得る空間点がある (cf. M.M. 43)。

(4) 『物質と記憶』のような心身関係の理論は『試論』では未だ引き出されていなかった、と『緒論』(cf. P.M. 97) でベルクソンは述懐している。

(5) 無意識には、無力な知覚もあげられているが (cf. M.M. 43, 157-163)、ここでは『試論』の意識に関する限りで、純粋記憶を扱う。

(6) ここで注意すべき点は、純粋記憶の意識への現実化を身体が制限するからといって、純粋記憶が身体内に保存されている、とは帰結しない、という点である。というのも、身体は、身体に働きかける諸対象と、身体が影響を与える諸対象との間に介在する伝導体にすぎないからである。この身体の反作用は、経験が身体組織内部に備え付けた器官の数や性質に依存し、そのため、身体が過去の作用を保存するのは、ただ運動装置としてのみなのである。それゆえ、身体から独立した記憶力が、時間の流れに沿って現れるイマージュを集める、と考えられたのである (cf. M.M. 81-82)。この身体と独立した記憶力は、日常生活のすべての出来事をその展開に沿って記憶し、その記憶は、表象として想起されるのである (cf. M.M. 85-86)。この記憶が「個人的な記憶」(M.M. 116) とも呼ばれる純粋記憶であり、その系列は、個人の「過ぎ去った実存 existence passée の流れ」(M.M. 116) を表している、と述べられている。

(7) 『知的努力』は有意的注意による理解・解釈を扱い、感覚的注意については採り上げないことが述べられている (cf. E.S. 172)。さらに、『知的努力』が扱わなかった、感覚印象に対する理解・解釈については、『物質と記憶』(M.M. 89-141) を参照するよう指示されてある (cf. E.S. 167)。

(8) この運動装置は本稿前節での脳の機構であろう (cf. E.C. 185)。初発的運動を引き起こす同一の脳の状態、同一の運動図式には、多くの心理的状態（記憶）が対応するが、任意の心理的状態が対応するのではない、とベルクソンは述べている (M. 481)。

(9) 前節より、純粋記憶の想起は身体の運動や感覚に関係づけられなければ現実化が不可能であった。知的努力の場合、標識・枠となる初発的運動の感覚が、純粋記憶の想起を可能にしていると思われる。

(10) 偉大な作家の作品を解釈する例では、ベルクソンは、作家の思惟の運動の再構成をめざすことを模倣とみなしたためか、解釈を「再創造 réinventer」(P.M. 95)・「再体験 revivre」(P.M. 95) としている (cf. P.M. 94-95)。

(11) 先述したように、完全に自動的な解釈の場合は、運動によって適応は直線的に行われるので、知的努力は必要ではない。

(12) 本稿第三節に述べたように、記憶の現実化は身体によって制限・調整されているので、記憶の選択は身体に関わる必要がある。解釈の場合は、本節で確認したように、標識・枠となる身体の初発的運動の感覚によって、記憶の選択は可能になっている。

(13) 原書では単に「図式」(E.S. 184-185) となっているが、ここでは解釈について述べているので、「運動図式」と区別するために「力動的図式」と記した。

(14) 『知的努力』(E.S. 175) には、「出来事へと展開すべき説」や「生きた人物に実体化すべき、個人的な感情あるいは社会的な感情」と

ある。

(15) 『精神エネルギー』所収の「意識と生命」では、「思惟が判明になるためには、思惟が語に分散する必要がある」(E.S. 22) と述べられている。

(16) もちろん、小説を解釈する場合と書く場合との間には差異がある。解釈の場合ではイマージュ（標識・枠）は既に与えられていた。しかし、小説を書く場合は、イマージュ（標識・枠）もなく、それを方向付ける図式も、小説家自身が生み出すまではなかったのである。また、小説を書くにはこの図式に従って言葉を選択しなければならない。小説家は試行錯誤して図式に言葉を組み合わせ、小説を現実化し、自己の意識に明晰さや判明さを与える。しかし、小説家が言葉を用いて、自己の意識を明確化・判明化させて「新しいこと」を創造／伝達したとしても、「新しいこと」が言葉という既知の要素によっていかにして伝達されるか、という問題が残るであろう。つまり、このような既知の要素の組み合わせで表現された小説は、解釈者に心的表層的生を起こすだけではないのか、という問題である。現在この点に深く関わることはできないが、「書くことの技術」(E.S. 46) からは次のように推測される。解釈の初発的運動の感覚を巧みに組み合わせることで、解釈者（読者）に気づかせないうちに小説家の思惟の運動を辿らせ、知的努力をするように導く、という推測である。このことは『試論』での小説家の表現（記述）の例にあてはまるだろう (cf. D.I. 99-100)。そこには、小説家が表現（記述）を用いて読者に反省へ導くことが述べられている。また『緒論』からは、偉大な作家を鑑賞する例 (cf. P.M. 94-95) が挙げられよう。

（こばやしてるあき　大学院博士後期課程）